

宇江敏勝

木の国紀聞

熊野古道より



宇江敏勝

木の国紀聞

古道より

新宿書房

木の国紀聞——熊野古道より

発行日——一九八九年二月一〇日第一刷

著者——宇江敏勝

© Toshikatsu Ue, printed in Japan, 1989

発行者——村山恒夫

発行所——新宿書房

東京都千代田区九段南四一六一二一七〇二二

電話〇三—二六三一—二六一〇 FAX〇三—二六三一—二七三五

振替 東京七—一二二四九七

印刷所——理想社印刷所＋栗田印刷

製本所——松岳社青木製本所

ISBN4-88008-131-0 C0095

乱丁本・落丁本はお取りかえします

木の国紀聞
目次

山と里と人と

11

注連縄しめなわづくり 12

ある隔意 17

斎藤たまさんの旅 22

彼岸の往来 27

山菜を摘む 32

筏乗記ばつじょうき 37

うちの和尚は百一歳 42

晶子の夏 47

楽しけれども 52

間伐かんばつのすすめ 57

木の実・草の実 62

山の神を祀る 67

故郷忘れがたく 72

ある再会 78

帰心 83

小辺路紀行

133

コサメ釣り

88

林業後継者

93

笛と牛車

98

母の花木かほく

103

国有林を見る

108

鐘の音

113

海彦、山彦

118

金色の炎

123

牛のあとつぎ

128

はじめに

134

ろくろ峠

137

大滝

140

水ヶ峰の天誅組

142

平辻たいつじ

146

萱小屋の墓 149

伯母子峠 153

馬方の碑 155

上西宿 158

大師堂 163

大塔宮の跡 165

熊の獵師 169

平維盛の伝説 171

三浦の天誅組騒動 176

三浦峠 181

古矢倉 183

新矢倉 186

西川の産物 188

船と筏 196

石畳の坂 200

峠はるかなり 204

果無峠 207

天誅組の末路 210

峠より下る 214

七色茶屋跡 218

八木尾^{やまお} 221

熊野本宮大社 おわりに

225

参考文献 230

いま、熊野古道の秋 233

あとがき 249

地図

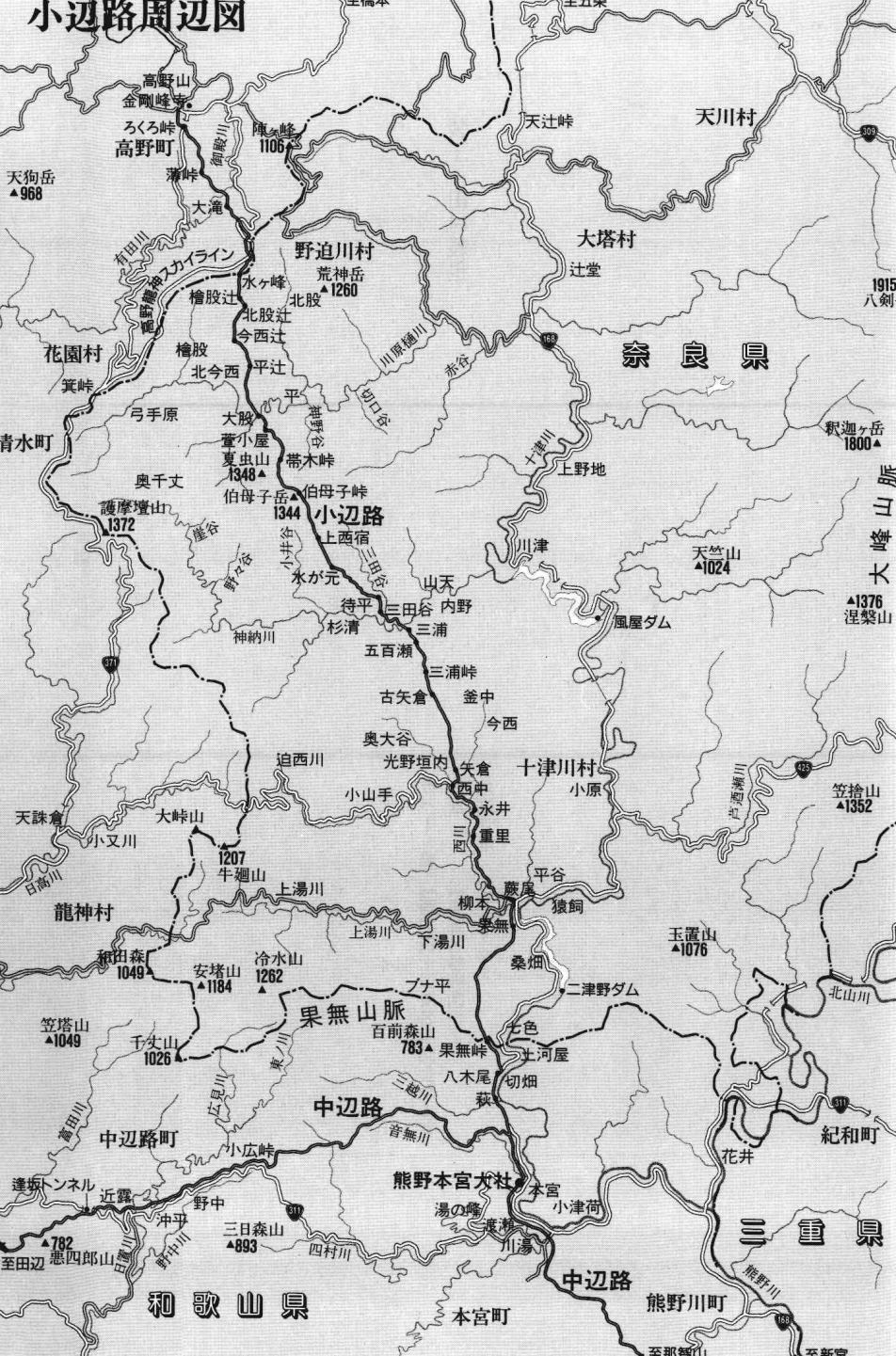
熊野古道略図

小辺路周辺図

熊野古道略図



小辺路周辺図



装丁 田村義也

カバー・扉
表紙
地図作成
『西国三十三所名所図会』より
『熊野名勝画図』より
恂モリシタ

木の国紀聞

——熊野古道より

宇江敏勝

山と里と人と

注連繩しめなわづくり

納屋の六畳ほどの作業場には、昼間から裸電球が二個、あわい明りをともしている。むしろを敷いた板の間のかたわらに使われなくなったかまどがある。壁には古い柱時計。藁わらをよを縦る乾いた音に、チョン、チョンという金属音が交錯する。注連繩しめなわをな縛っているのは奥さんのスミエさん、縄からはみ出したばくそ（藁屑）を、豊さんは鋏はさみで切つてそろえるのである。外は十二月のうすら寒い雨。

ふと立ち寄った山林豊さんの納屋で、注連繩づくりを見せてもらいながら、私たちはかつていっしょに働いたころの思い出をなすをする。

昭和三十五年から四十年までは西ン谷で、また四十七年ごろまでは果無山脈はてなしと、いずれも和歌山と奈良の県境の植林小屋で、多いときは三十名近い仲間たちと暮らしたのだ。春は杉や檜ひのきの植林、夏は下草刈り、そして秋から冬にかけては、つぎの春の植林のための地ごしらえ、といったふうに、一定のサイクルに従つて働いていた。植林がもっとも盛んに行なわれていた時代であつ

た。豊さんも里で五〇アールほどの田畑を耕作するかたわら、山稼ぎによる現金収入で子育てをしたのだった。

「わがら（われわれ）の植えた木も大きゅうなったやろのう」と豊さんは言う。

「いま生長の盛りやな、そやけど除伐も間伐かんばつもせんさか、ろくな山林にならんぜ。不景氣やいうて、民有林も国有林も手入れせんと、ほったらかしや」と私。

「西ン谷から五本松の峠を越えて帰って、方杉ほうさん（酒屋）で飲んだ酒はうまかったのら」と豊さんは笑いながら言う。「腹へっとるもんやさか、じきに足とられるほど酔うてのら、転げもうて家へ戻ったわだ」

「おとうちゃんは、今でも飲むんやぜ」とスミエさんが口を添える。

「あかんわ、もうトシや、昔みたいにはよう飲まん」

山小屋などでよくいっしょに飲んだ場面を私は思い出す。人柄そのままに陽気な酒で、酔うと、ひとまわり以上若い私とも相手に、軍隊での体験を語って聞かせ、やがていい調子で戦場での歌（勇ましい軍歌ばかりではない）を歌い出した。

ところで、注連縄づくりだが、これは近年の山村の様変わりをそのまま映し出しているようだ。植林ブームの時代は、おおむね零細な山村農家では、こぞって山仕事に集中した。賃稼ぎをするばかりでなく、まるで杉や檜以外は値打ちがないかのように、自分の採草地や畑や、はては休耕田にまで植えた。そのためにこの里における耕地面積は、かつての半分程度までに減少してい

る。もはや里山と奥山とをとわず、植えつくしてしまったのだ。

そこへ長びく木材不況である。先行不安で気落ちした林業家は投資を手控える。木材は売れず、植林もせず、必要な手入れも行なわれず、という状態で山仕事は激減した。

仕事が切れた合間に、耕地を持っている者は、休耕田なども再び耕して、換金作物の栽培をはじめた。ピーマンやシソは農協が音頭をとって、数年前から町の市場へ出荷されるようになった。注連縄づくりもその一環である。葉は山あいの田圃でとれたものがあり、飾りつけのウラジロ（辛^し藍^だ）やユズリハは近くの山林から手に入れることができる。いわば純農村とは一味ちがった山村農業の複合経営の復活といえよう。

注連縄づくりは、稲の収穫のすんだ十月の中ごろから本格的に行なわれる（芯の部分だけは春先からこしらえる場合もある）。葉はいい色艶を保つよう丁寧に乾燥させ、そのときサガリに使う稲穂も、とくに粒の美しいものを選んで保存する。

まずは藁^{ぞうり}ごしらえから始める。むかし草履に編んだような藁打ちだが、なにしろ量が多いので、豊さんは自分で工夫した機械を発動機と組み合わせさせてやっている。必要なだけを打っては注連縄に綯うのである。

注連縄の大きさは、家庭用のもので特大、大、中、小と四種類あり、ほかに車に飾るものと、メガネと称する單車、自転車のもので、かたちも多様で、一つひとつを手作業でこしらえる。夫婦は座敷に坐りこんで、ラジオを聞いたり、おしゃべりしながら綯っている。一見のんびり